

港北区災害ボランティア連絡会ニュース

事務局 〒222-0032 横浜市港北区大豆戸 13-1 吉田ビル 206 港北区社会福祉協議会 創刊号
TEL 045-547-2324 FAX 045-531-9561 E-mail hokuhoku@kouhoku-shakyo.jp 2012,7,18
入会は随時受け付けています。あなたの町の防災度を高めるためにお力を貸してください。

創刊に当たって

会長 井上禮子

このたび港北区災害ボランティア連絡会ニュース紙を定期的に発行することとなりました。常日頃より連絡会にご理解、ご協力を頂きましてありがとうございます。いつ来てもおかしくない災害に備えて、この連絡会ニュースが少しでも皆様の気持ちの支えになることが出来たら、幸いです。

会が発足いたしまして、17年になります。阪神・淡路大震災が私たちにボランティアの必要性、コーディネーターの大切さを教えてくれました。

そこで会を作るにあたり、沢山のボランティアが来てくださった時に、必要なおおじられるように、素晴らしいコーディネーターになりましょうということで、会を発足いたしました。ようは勉強会です。いろいろの先生の話聞き、現場に行き、当事者の話も聞きました。区役所の総務課や港北区の社会福祉協議会とも話し合いを致しました。私たちがいかに皆様方の要望に応えられるかは、まだまだ先かも知れませんが、これからも頑張ってお勉強していきたいと思っております。

現在では、会と致しましてシミュレーション、コーディネーターセミナー等を行っております。どうぞ一度会にいらして下さい。

災害ボランティアセンター運営訓練風景



編集の方針

編集部

港北区災害ボランティア連絡会が出来て14年になります。この間会のチラシを作る、ホームページを作成する、会員がロコミ呼びかけをする、との様々な努力で会員拡大を図ってきました。しかしまだまだ地域での認知度が低いとの指摘が会員からもされています。多くの方々に災害ボランティア連絡会の存在と役割を知ってもらい、災害が起きた時に有機的な活動が出来るための土台作りとしてニュースを発行することとなりました。会員相互の交流、災害ボランティア連絡会が何をするとおこなうのかを知ってもらうための道具となれば幸いです。

今月の案内

「コーディネーター養成講座」

日時：2012年7月28日（土）10時～12時

講師：山添訓さん（横浜YMCA）

「災害ボランティアコーディネーターのいろ・は」

これまでの災害を振り返りながら、災害時のボランティア活動と、それをまとめる災害ボランティアコーディネーターの役割を考えます。

東日本大震災支援の現場

「今求められる支援は」

発災から一年三ヶ月経った今、現地ではどのような支援が必要なのでしょう。

今東北各地では女性が中心になってのもの作りグループが多く作られ、アクセサリや小物類を作り始めました。また海産物の加工品も出始めました。

港北にいてできる被災地支援

東日本大震災支援全国ネットワークが作った現地の物産の販売支援ページです。

http://www.jpn-civil.net/manufacturing_info/

「心を届ける」

お金は大事ですが、元気のもととはそれだけで

はありません。阪神淡路大震災の時から支援してきた神奈川のグループのソクラテスプロジェクトは今回も磯子区の主婦グループが作った手作り鯉のぼりを現地に送りました。



参加団体紹介 その1

「港北区社会福祉協議会」

こんにちは、港北区社会福祉協議会（以下区社協）です！

区社協は港北区にお住まいの地域のみなさんや福祉関係団体、行政などと連携・協働して「誰もが安心して暮らせる福祉のまちづくり」を実現するために地域福祉事業を行っている民間団体です。

災害時には災害ボランティア連絡会や行政と協力して災害ボランティアセンターを立ち上げます。災害ボランティアセンターでは全国から集まるボランティアを受け入れて、地域から上がってくるボランティアニーズに対してボランティアを派遣するコーディネート業務を行っています。

また、災害ボランティアセンター以外にも、多様な福祉ニーズに応えるために、ボランティア活動に関する相談や活動先の紹介、小中高生や社会人を対象とした福祉育、高齢者や障がいのある方の権利を守るあんしんセンター事業などなど、高齢の方も障がいのある方も地域で安心して住み続けられるようにいろいろな方々と力を合わせて活動しています。

災害ボランティアセンター—口メモ

「災害ボランティアセンターはどう作るのか」

大きな災害では地元の力だけではどうしても回復させられません。ボランティアを始めとした多くの力を有効に使う組織が必要です。それが「災害ボランティアセンター」（災害ボラセ

ン）です。

まず集まれる人々が集い、その中で役割分担しながらセンターを作り上げていきます。現地社協、青年会議所、現地のボランティア団体、応援に駆けつけた経験ある災害ボランティア、などで構成されることが多いのですが、かなり偶然性に左右されるのが実情です。中越地震での十日町市災害ボラセンは発災後4日後、川口町ボラセンは8日後、東日本大震災では立ち上がり迄2週間～20日程度もかかっています。

経験あるボランティアがいないとうまく動きませんが、経験に捕われてもうまくいくものではないのが難しいところです。そのためにも地元との協調が大切です。

自治会町内会の活動

大豆戸町内会など、4つの町内会は大豆戸小学校が地域防災拠点となっていて、例年防災訓練を実施しています。多くの方たちが参加できるようにと、日曜日の昼間に行われていますが、災害はいつ起きるかわかりません。そこで昨年は、夜間に大地震が発生したという想定で、初めて夜間訓練を実施しました。

午後6時、避難場所である大豆戸小の体育館に、近隣の方たちが続々と避難して来ました。受付では、ランタンの明かりの下、避難者の名簿を作成、町内会ごとに区分けした場所に案内しました。区分けは、体育館内に敷きつめたブルーシートに大きく町内会名を表示し、場所取りのための混乱が起きないように配慮しました。館内に女性の着替え場所、授乳場所として、テントで仕切った仮設のスペースを設置、このスペースを実際に利用された方がいました。また、停電になったことを想定し、発電機でライトを点灯、十分な明るさのない中での体験もしていただきました。

訓練は約2時間で終了しましたが、いろいろな条件の中で、実際に災害が起きた時に、私たち自身がどう対処するか出来るかを問われた訓練でした。

大豆戸小学校地域防災拠点運営委員長 篠崎元彦

編集後記 ■横浜に大震災が起これば日本中、世界中からボランティアが来てくれます。その方々の力を充分生かせるよう準備したいと思います。（山本） ■言い出しっぺの責任から作った第1号です。ぜひ皆さんの声で大きく育ててください。（宇田川） ■防災って？災ボラって？まだよくわからないのが現状ですが、わからないからこそ皆さんと一緒に一から考えていけるかなと思っています。（山口）